



書評 | Book Review

目代邦康・柚洞一央・新名阿津子編（2015）『シリーズ大地の公園
中部・近畿・中国・四国のジオパーク』東京：古今書院。

Geoparks of Chubu, Kinki, Chugoku & Shikoku Regions in Japan

鈴木晃志郎（富山大学・准教授）

Koshiro SUZUKI, Ph. D. Associate Professor, University of Toyama

長年司会を務めてきた長寿バラエティ番組『笑っていいとも！』が2014年3月に終了、時間的にも余裕を持てたのだろう。2015年4月に復活を遂げた『ブラタモリ』の新シリーズで彼は東京を離れ、文字通り「国の光を観る」地方ロケをその目玉に据えた。たまたま縁あって、いかにも郷土史家然とした人物の案内の下、タモリが散策に興じる『函館』の回を見る機会をもったのだが、何より驚いたのは、至って自然に彼の口を吐いて出てくる「りくけいとう陸繋島」や「かいしよくがい海食崖」といった地形学用語であった。むろん、高校地理を嚙ったことのある者にしてみれば、陸繋島や海食崖は学習範囲に収まる程度の基礎的知識かも知れない。しかし、日本史で大学を受験した評者がこのタームを知ったのは、ずっと後年になってからのことである。番組を通じて学び取った地理学的な教養を上手に応用し、函館の町中に残された凸凹の形成史を読み解いてみせる彼の姿を見ながら、気軽に地理を楽しむ層の拡大に彼が果たした貢献の大きさについて、考えさせられるところ大であった。

折しも2014年1月、文部科学省は地理歴史科の選択科目となっている日本史の必修化に向けた検討を始め、同年11月の中央教育審議会（中教審）総会では、下村文部科学相が中教審に諮問を行ったことが報じられた（下村 2014；産経新聞 2014年11月20日付）。これにより、早ければ2016年にその答申が出される見込みとなり、東京五輪が開催される2020（平成32）年度の新指導要領にそ



れが反映される可能性が出てきた。世界史の必修化と高校地理の選択必修化（1986年）に続き、日本史の必修化がなされれば、受験科目としての地理のプレゼンス低下は日の目を見るより明かで、履修人口の減少は

遠からず地理学に対する一般社会の理解や関心の低下にも繋がっていくと予想される¹⁾。地震・火山大国である日本において、地理学が果たしている役割を看過できないことは申すまでもなく、単なる都市名や気候区分の暗記科目といったイメージの払拭も急務であろう。身近な環境学習の場としてのジオパークはまさにその格好のフィールドの1つになりうる可能性を秘めており、評者もジオパークをそうした日本の地質・地形学的な特性を踏まえたジオツーリズムの場として利用することが重要と考える者のひとりである（鈴木2014）。都市空間の中に紛れ、造成や暗渠化^{あんきょか}によって消えかかった大地の痕跡を見出しては地理学的に遊んでみせるタモリの姿は、ジオパークにおいて行われるべき理想の姿のひとつを指し示しているようにも感じられた。

2015年6月に出版された本書は、シリーズ全体を監修する自然保護助成基金主任研究員の目代邦康ら三人が編者を務め、恐らくは今後、東北北海道や関東圏、九州沖縄地域をまとめた続編によって完結するであろう『大地の公園シリーズ』の第一巻として構想されている。全体は標題にある通りの地域区分に基づく4部構成で、各部の冒頭に(1)地質、(2)地形、(3)考古・文化、(4)生態の4分野に分けて合計6ページ程度の地域概観が記され、中部6、近畿・中国3、四国2の計11ジオパークについて、当該地区の推進協議会事務局や学芸員、地形・地質関連分野の研究者らが思い思いに当該ジオパークの見どころを一つの大地の物語(ジオストーリー)に仕立てて紹介するという体裁になっている。

全編カラー印刷。素人目にもかなりお金の掛かった本である。にもかかわらず、2600円まで価格を抑えたのには、現場サイドのかなりの尽力があったであろうことは容易に推測できる。そのお陰で地形図や鳥瞰図、写真類がほぼ全てのページにわたってふんだんに用いられ、少なくとも地理学に何らかの形で関わりのある方々であれば、恐らく誰もが眺めるだけで十分に楽しめる読み物になっている。その上で本書が画期的なのは、いわゆる地形・地質の専門家だけで書かれる専門書の類とは異なり、一般の広い読者層(つまりは潜在的な来訪者)にも開かれた書籍を明瞭に志向していることであり、大地の営みがそれら読者の身近な生活や文化にもたらした様々な影響にも配慮した書き方がなされていることである。地理学全体の社会的プレゼンスが問われている昨今、ジオパークやジオツーリズムの領域において、楽しみ方を指南する観光案内書の性格を帯びた書籍を、有識者たちが先導して出版にこぎつけたことの意義の大きさは、強調してもし過ぎることはない。関係者諸兄に深く敬意を表したい。以下の記述は上記を踏まえた上で、近年、観光学に専門の軸足を置いてきた評者からの、他視点の提供であるとお考

えいただきたいと思う。



評者は大学院までは観光案内書をめくって論文を書いてきた(Suzuki and Wakabayashi 2005)。いずれも東京やニューヨークといった観光地を紹介する目的に沿って書かれていながら、アメリカの案内書と日本の案内書ではその体裁が全く異なっている。評者はこれが文化的差異によってもたらされたものと考え、認知科学的な観点から内容分析を加えたのであるが、この違いが生じる理由のひとつは、「そもそも想定している読者層が違う」からなのだということを、のちに欧米人との議論の過程で教わった。

日本人が写真や地図をふんだんに使ったカラフルな案内書を出版するのは、それを携帯して観光地での町歩きをすることが想定されているからである。つまりはナビゲーション・ツールとしての役割が濃いのである。しかし、欧米人にとっての観光案内書は、どちらかという旅先に思いを馳せながら自宅や旅先のホテルで座して読む紀行文や教養書に近い位置にある。旅先の欧米人を見ることがある方ならお分かりのように、彼らの多くは移動中、観光案内書を手に持っていないのだ。欧米の観光案内書には、水先案内人の個人名が著者として記されているものが多いのだが、これは日本の観光案内書にはみられない傾向であり、彼らにとっての観光案内書の役割が我々とは異なっていることを端的に物語っている。

本書が開かれた書籍を志向するのであれば、その読者層として想定されるのは誰で、どのような用途であろうか。これを明らかにしておくのは、マーケティング戦略の要諦である。この観点から本書を読み返すと、シリーズの第一巻でありながら本書には、そもそもジオパークとは何であるかの説明や、シリーズ全体ないし本書のねらいがどこに置かれ、ターゲットとなる読者層に誰を想定

しているのか（つまりは企画全体の趣旨は何であるのか）についての記述がきわめて限られていることに気づかされる。

もし本書が、冒頭「本書の使い方」にあるように、個々のジオツアーコースの紹介・解説に力点を置き、各地のジオガイド養成や地学教育の参考資料として活用されることを主目的とするなら、多少統一感を犠牲にしても各ジオパークのユニークさを強調し、紹介文を通じてジオガイドやジオサイトの顔が見える文字通りの「ガイドブック」集成であっても良かったのかも知れない。現地でガイドとして活動している人の語りやエピソード、当該地域のジオガイド関連組織やガイド資格取得の要件などが記されることもあり得るだろう。学校教育の場としての利用を想定するなら、ジオパークを利用した校外学習の事例報告が入ることも考えられる。

一方本書には、これ一冊あれば一般の旅行者が旅先で困らない、標準化されたモデルコースを提供する観光案内書としての役割も考えられる。この役割を志向するなら、全体の章構成や記法は揃えたほうが良いであろうし、ガイドなしでもそのコースを歩けばアトラクションがある程度楽しめ、ジオサイトの見方も含めて懇切丁寧なコース案内になっている必要がある。その前提として、地形図の読み方指南やキーワード解説などは基礎的事項として必要であろうし、現地のジオサイトの目印、そこまでの交通手段、モデルコースの所要時間、ガイドの手配方法や料金体系なども記述する必要が出てくるかも知れない。そこへ行くと本書の体裁は、一般の読者がブラタモリするにはまだハードルが高いように思う。畢竟、本書は広い読者層を志向しているぶん、「本書の使い方」が誰のどのような目途を想定して書かれているのかがいささか見えにくくなっている。そこに今後増えるであろう類書が考えるべき課題が残されているように感じられた。

特に本書は、一冊がカバーする範囲が中国地方

から中部地方までと広大である。これだけ広い地域のジオパークを、統一感の取れた目線で記述することが甚だ困難な作業であることは申すまでもない。恐らくは編者も、原稿を依頼する際には、前述した(1)～(4)の4領域の関係性に触れながら記述して欲しい（＋専門的になりすぎないように、写真や図を散りばめて、視角的にも楽しめるよう配慮して欲しい）くらいの方針を示すにとどめ、各執筆者の自由裁量をできるだけ大きくしたのであろう。しかし自由裁量が広がった分、各々の章構成や記述内容の不統一が目につく結果になっている。特に単著で書かれた章のいくつかでは、著者の専門領域（関心分野）の濃淡や個別のジオパークに対する問題意識の差異がコインの表裏となり、全体の統一感を弱めてしまっているように思われた。

雑学を嗜むのが上手いタモリのキャラクターに依るところが大きいのは申すまでもないとはいえ、ブラタモリの場合、ターゲットと企画の狙いは明確に設定されていた。「古地図一枚を通して見るだけで、通い慣れた摩天楼の下の見過ごしがちな大地の凸凹が、悠久の歴史と繋がっているのだという発見につながる（＝ちょっと見方を学ぶだけで、何の変哲もない日常の生活圏の中にこんな歴史が隠れていて、凹凸すらアトラクションとして楽しめるものになるのだと分かる）」、そんな小さなロマンとワクワク感を、何の知識も技能ももたない一般視聴者にもたらそうとする、企画者側の明瞭な意図があったから、『ブラタモリ』は深夜枠でありながら平均視聴率 8%を達成するヒットを記録したのであろう。

もちろん、こうしたマーケティングの視角と技法は、本来であれば旅行会社や旅行案内書の編集部、番組の制作スタッフなど、プロのプランナーが得意とするものである。個別ターゲット向けの本は、幅広い読者層が手に取ることのできる書籍が出版された後で初めて可能になるのだろうし、その最初の橋頭堡^{きやうとうぼ}を築いた本書の意義を「強調し

てもし過ぎることはない」と先に述べたのも、正しくこの文脈による。人々に面白がってもらいながら、いつしかジオパークめぐりの素養とジオパークへの理解を身につけてもらうためにはどのような工夫が必要か。その知恵を、共同企画やコンペなどを通じて周りから上手に借りながら、裾野を広げていく工夫が今後は求められてくることになるだろう。大地の凸凹に理解のあるタモリ氏本人を招聘してジオパーク普及の旗頭になっていたが、彼と各地のジオパーク研究者が共同でジオパーク巡りをするシリーズくらいの思いきった企画が出てきても良いと思うし、それを後押しするくらいの度量が関連学会の側にあってもいいと個人的には思っている。

注 記

- 1) ただし、同年 12 月 22 日の答申（中央教育審議会 2014）では、2020（平成 32）年度からの段階的な「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」導入に加え、小論文や面接、集団討論などの活

用によって思考力・判断力・表現力を重視した評価を行う大幅な制度改革が提言されており、そもそも現状、高校教育の帰趨は他教科を含めて先行き不透明である。

文 献

- 下村博文 2014. [初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について](#). 文部科学省.
- 鈴木晃志郎 2014. [ダークツーリズムの視点からみたジオパーク、ジオツーリズムの可能性](#). *E-Journal GEO* 9(1): 73-83.
- 中央教育審議会 2014. [新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について](#)（答申第 177 号）. 文部科学省.
- Suzuki, K. and Wakabayashi, Y. 2005. Cultural differences of spatial descriptions in tourist guidebooks. In C.Frekso, B.Nedel, M.Knauff and B.Krieg-Brückner eds. *Spatial cognition IV, LNAI 3343*. Berlin, Springer-Verlag: 147-164.